

こうづ りきお
神津 里季生

基幹労連・事務局長

1割、2割でいいから本質を考えたい

<ホントに忙しい>

基幹労連の事務局長となって1年と3ヵ月が過ぎた。覚悟はしていたがここまで忙殺されるとは思っていなかった。

もちろん労働組合という組織において書記長あるいは事務局長という役職は非常によくできたものだと思う。とにかく情報は基本的には全てここに集約するというのが、その機能の重みの最たるものであると思う。そしてその情報をどう通わせ、分配し、役に立てていくかということは極めて重要な要素である。

とはいえ、現実を見据えると、この役職の実態はかなり雑務が多いものであって、8割方はどうでもいいというところかなり(相当に)語弊があるが、あまり本質にきりこむようなものとは違う仕事をしているような気がする。

しかし考えてみれば世の中の仕事の多くは似たり寄ったりであって、しかし1割でも2割でも、本質的なことを考え、それを前に進めるために汗をかくとすれば、それは極めて恵まれた立場にあるといえよう。

労働組合に対して、巷間様々な言われ方がされているが、私はこの1割、2割のなかで本質をしっかりと押さえるならば、労働組合の存在意義はまだまだこれから、と言うか、

いよいよこれから大いなる発展を遂げなければならぬものであると思う。

<目的化してはダメ>

労働組合がなんで大事かと問われれば、私としてはまずは一言、皆いい人生送ろうよ、ということであると考えている。

最近はやたら命を粗末に扱う、扱われるニュースが目立っており、そのへんが大変心配な世の中であるが、やはり本当はいい人生を送りたいと言うのがなんといっても普通であろう。いや人間どうせ死ぬんだし、そんなことはどうでもいいと言われると困ってしまい、ここでこんな話をする意味がなくなってしまうのであるが、それは明らかに別の世界の話としてこれ以上は突っ込まない。

いや俺はいい人生を送りたいとは思いますが、別に労働組合などいりません、と言う人。これは結構多い、残念ながら多いのが現実であろう。

もし本当に、皆がいい人生を送るために労働組合が何の役にも立っていなくて無用の長物であるならば、私は即座に労働組合など全部解散したらいいと思う。アホなこと言うなという人、言ってくれる人がおられるかどうか



かわからないが、このことは大変重要なことである。

確かに労働組合は水や空気のようなものであって、困ったときになって初めてそのありがたみがわかるという性格のものかもしれない。しかしそうなのであれば、ただそれだけの存在なのであれば、それはそれで割りきっていったらいい。いったん全部解散すればいいのである。それで本当に皆、身にしみて困ったら、また力をあわせて組合をつくれればいいのである。

逆説的なものの言い方をするとと思われるかもしれないが、私は最もいけないのは、労働組合の存在自体を目的化することであり、そういう思考をしてはならないということ、常に戒めを含めて頭に置くようにしているつもりである。そこに組織があるから、そこに人がいるから、労働組合は細々と存続する、みたいなことは許されるべきではない。

いい人生をみんなが送るために、労働組合が必要か否か。これから先も必要か否か。...私は必要だと考えている(もったいぶってすみません)。もちろんもっと力をつけていくべきことを前提にして。

<本物のモチにしていこう>

一方で労働組合は、一人でも多くの人たちがその存在意義を前向きに認識しないと、本来の力の発揮につながらない。そのためにも大事なことがある。

労働組合の活動の真っ只中にいる人たち、執行部の人間は、労働組合の存在を当たり前として、いろいろと余計な仕事を作ってはならない。本当に必要とされること、労働組合組織でなければできないこと、本当の意味で頼りにされることは何なのかを常につきつめて考え、実現していかなければならない。

そして労働組合の活動に普段縁遠い人たちには、労働組合が消滅したらいい世の中になるのか、それとも困ったことが生ずるのか、どういう方向に世の中が進むのか、ということを実際に考えてもらうことが重要だ。とりあえず俺は困らないよ、ということではなく、自分の将来、自分の子供・孫たちの将来のために、という視点で。

しかし最後に話をひっくり返すようだがこれが実に難しいんですね。正月なのに絵にかいたモチになってしまう。微力ながら、本物のモチにするためにあらゆる手立てを考えていきたいと思う。今年の抱負です！